

生徒・卒業生・若者の声



子どもと一緒に育つ

「福井大学」探求ネットワークの

取り組み

福井大学教育地域科学部

学校教育課程 教育実践科学コース三年

ふれあいフレンドクラブ(FFC)三年目

加藤 儀直

一・土曜日のキャンパス

土曜日の大学に地域の子どもたちと学生が集まって活動を行います。普段の学

校とは違う新しい「学び」がそこでは展

開されています。紙すきに挑戦する子、

料理に挑戦する子、福井のまちを調査す

る子、スタッフと「ふれあう」ことを重

視して活動する子など様々な光景が見ら

れます。これが、福井大学「探求ネット

ワーク」の少し変わった日常の風景です。

二・これまでのあゆみ

「探求ネットワーク」の活動が始まっ

たのは、今から約一七年前のことです。

当時（探求ネットワークの前身である

「学習過程研究」というゼミナール）は、

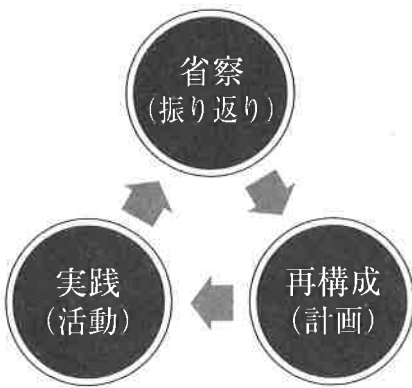
公開講座という形で現在の活動スタイル

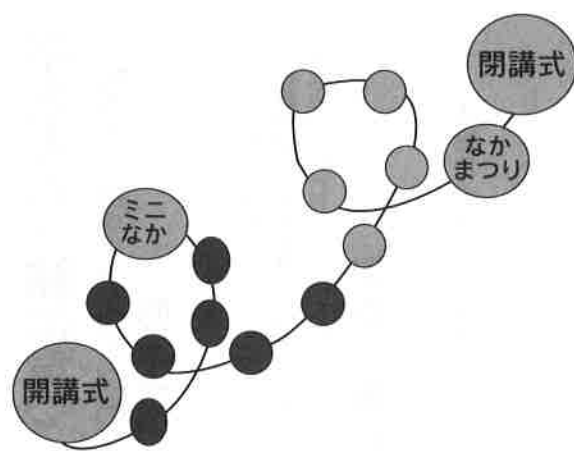
とは大きく異なっていました。それから

数年後、日本の学校教育では週五日制が

導入され子どもたちの生活の中に「自由

な時間」が増える形となりました。探求





ネットワークではこの週五日制に注目をし、これまで隔週土曜日に学校へ行って学習をしていた子どもたちを大学のキャンパスに呼んで、長期の展望の中で活動を行うことをスタートさせました。これが一九九五年のことです。

探求の発足当時は、現在よりも規模は小さくハード面、ソフト面での整備が行き届かず困難な一年でした。そのせいな

のか、長期の展望の中での活動は、スタッフにとってみるとものすごく「大変」であり次年度も引き続き探求の活動を続けたスタッフは、わずか二名にとどまりました。二年目の探求の活動は、まだまだ手探りの状態であるところはあるものの、前年度の活動を振り返ることで活動をデザインしていくなど、今でも受け継がれている活動のデザインのスタイルがこの時に構築され始めました（右図参照）。

発足から四年がたつと、次の世代（一つ下の学年へ）のスタッフへと世代交代が行われました。しかし、単に「受け継ぐ（継承する）」のではなく、一つ下の学年以外のこれから「探求」にかかわるスタッフ誰もが当時の活動を概観できるようにと、活動の実態を報告書として残すということがこの時期に生まれました。また、この時期には中間発表会の「ミナかまつり」が行われるようになり、各ブロックが長期の展望の中で活動を展開するということが明確に位置づけられました。

二〇〇〇年度からは、規模が拡大（活

動のブロック数など）していったがこれまでとは大きな差異はありませんでした。しかし、規模の拡大によって変えなくてはいけなかったことが「組織面」のことです。このころは、特にハード面の強化がされはじめ、現在の探求ネットワークの運営のスタイルが定着していきました。

三. 何が培われるのか

このような歴史的経緯があり、今にいたるわけですが、このような活動は決して一人だけではこなすことはできません。いろんな仲間が相互に協力し合いながら作り上げていかなければいけません。

私は、よく、キー・コンピテンシーに示されている概念を引合いに出して説明をします。学習指導要領が改訂され、また、日本の学力低下が危惧される中、これからの未来を担っていく子どもたちに今後少なくとも一〇年間、どのようなことをする必要があるのか。よく言われるのが、「知識基盤社会」を生き抜くための力。これだけではなかなかイメージ

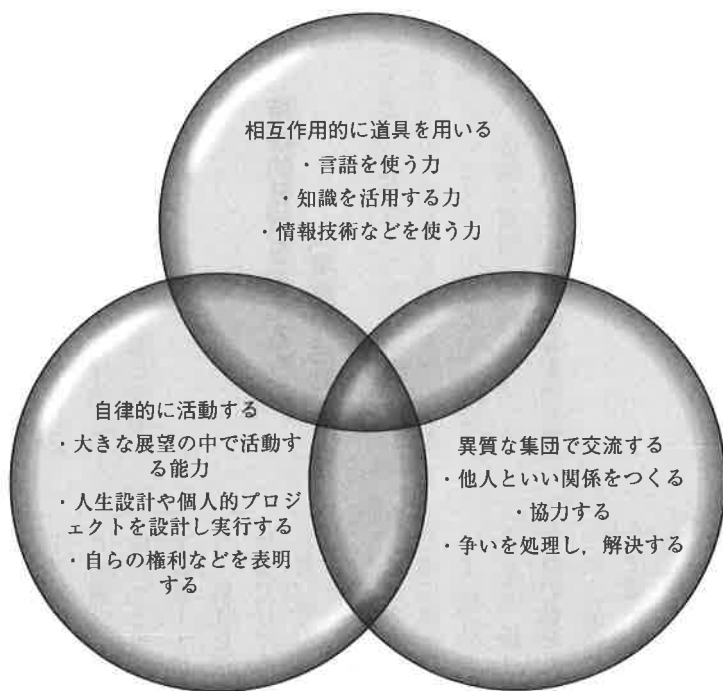


図 1 : DeSeCo のキー・コンピテンシー

しにくいので、図1にそってていまましょう。

まず、「相互作用的に道具を用いる」ですが、これももう少し具体的に見ていくと①言語を使う力、②知識を活用する力、③情報技術などを使う力という三つ

の力の育成が必要であることが示されています。長期にわたる活動の中で活動することを目的とするのではなく、発表の場を設けることで子どもたちに自分たちのやってきたことを発信してほしいと願っています。これには、自分自身の体験や経験を「言語化する力」など必要になってきますよね。子どもたちの活動を支えるのが私たちですが、学生スタッフにもちゃんと発表の場は保障されています。学生たちは、自らのやってきたことを「実践記録」という形で残していく、年度末の報告会では一年間の実践を報告することになり

ます。学生スタッフの場合、一年目〜三年目で報告書に書くときの視点は異なりますが、子どもたちと同じような力が必要になってきます。

次に、「異質な集団で交流する」ことですが、これは探求に限らずいろいろな場面で行われています。特に、探求のよに長期の展望の中の活動をしていくには、学年の垣根を越えて、異学年が相互に協力し合いながら活動を作っていくことが子どもにも、スタッフにも求められています。

最後に、「自律的に活動をする」ことですが、どのような活動を作っていくにも必ずそこには一つの共同体、私たちはこれをコミュニティと呼びますが、そのような集団が存在しています。コミュニティの中に入ると、なんらかの役割等を与えられ活動を作っていくようになりますが、どのような役割であつても、探求で大切に行っている「大きな展望の中で活動をする」という根底にあるものは変わりません。

このような能力というのは、やはりボーンと講義や授業を受けているだけでは

育ちません。このような力というのは、探求だけではなく実社会に出てからも必要になってくる力であるので、学生・子どもたち全員が探求の活動を通して磨いていきます。

四・持続的発展を支えるもの (実際の活動)

ここまで、探求ネットワークのねらいや歴史について記してきましたが、実際に活動しているスタッフはどのようなことを考え、活動を展開しているのでしょうか。四節では、私の実践記録を示しておきたいと思います。

(1) T君との活動

T君につくと決まったとき、T君に関することはほとんど知らなかった。唯一わかっていたことといえば、「T君はかわいい」ということだけであった。一年目のときについていたA君のときは、深く悩むことも無く活動することができていたので自分自身の中では「大丈夫だろう」と思っていた。

このような思いで開講式を迎え実際にT君を目の前にすると、考えが甘かったと痛感させられた。T君に「こんにちは!!」と声をかけても返事が無く「いつてきまーす!!」と言って走り出してしまふ。私はただ走り出すT君の後を追いかけるだけであった。「いつてきまーす!!」と言って走り出したT君であったが、校舎の裏に回ると急に走るのをやめてしまった。私のほうをじっと見つめ、T君のそばに来るのを待っていたのである。そこで、私は「よーいドン!!」と言ってみた。すると、掛け声にあわして走り出す。走らない私を見ると、「何で走らんのやー」という表情で戻ってきた。そのような調子で追いかけてくると、一回目の活動はあっという間に終わってしまった。

二回目の活動からはT君の遊び方に決まりが見えてくるようになった。初回の活動は、はじめて参加するということもあり体育館内へ行こうとしなかったが、二回目からは体育館と外を行ったり来たりを繰り返すようになる。外では校舎の周りを走り回ったり、車の中をのぞき込

んだりを繰り返していた。車を覗き込む時に時折「おとこ!!」「おんな!!」と言うことがあり、T君なりに何らかの線引きをしているのが伺えた。

外で車を見たりするとT君は体育館の入り口で立ち止まる。ふれあいタイムの時間はすでに終わっていたが、体育館内で他の子たちが楽しそうに遊んでいるのを見て目の色を変えていた。そこで、入り口から一番近いところにあった新聞プールに手を引っ張っていくと、楽しそうに遊び始めたのである。このときにT君の中で体育館は運動をする場所だけではなく、新聞プールのような楽しい遊びもあるという概念が少しずつ構築されていった。

三回目の活動では、筆者自身がアプローチを変えようと考えた。T君の後を追うだけであったので、T君と同じ視点で楽しみを共有しようと考えた。すると、このような変化がT君のなかで見られるようになる。

私「走る時は?」

T君「よーい…ドン!!」

私「そおや!なら言うで!よーい…」

ドン!!」

走るときの「よいいドン!!」と言うのは、初回の活動で何かアクションをする際の合図として使っていたので、T君は自然と「よいいドン!!」という掛け声があれば追いかけることができる(何か楽しいことができる)と思ってくれるようになった。子どもの理解をするには相当な時間がかかるが、そのためにはまず、子どもと同じ楽しみをすることが重要であると感じた活動となった。

四回目の活動からは車を見ることが少なくなり、中での活動する時間が増えるようになった。しかし、F F Cの活動をしている校舎はT君が通学している校舎でもあるので、活動中何度も本来入ってはいけない区域になっている。「小学部の遊戯室」へ「いく!!」ということが多くなった。F F Cの活動でふれあいタイムに参加したことが無いT君にとつてみると、遊戯室で遊ぶことが一番の楽しみなのであろう。遊戯室にはピアノや滑り台、トランポリンなど体育館内に無い遊び道具がたくさんそろっているのです、その場所ですんでいるときはいつもよりも楽し

そうである。この回の活動からT君は遊戯室へ行くようになり、遊戯室へ私を誘うようになった。

夏サイクルはT君が欠席することがあり、実質T君と活動したのは二回だけに終わった。毎回活動をともしているとわからない部分があるが、日をおいて活動をしたことでT君の成長した姿を見ることができた。

七回目の活動のとき、いつもなら校舎の周りをぐるぐる回ってお散歩しているが、この日はお散歩はせずにすぐに体育館内に入ってしまった。そして、私との追いかけて楽しむかのように中学部の教室前を走った。暑い中走り回るとすぐに疲れてしまうので何度もお茶を飲みに行ったりしていたが、最終的には私を小学部のほうへ一生懸命引っ張っていきこうとした。

私「学校は…?」

T君「おやすみです。」

A先生(小学部の先生)「Tくん!!」

私「学校は?」

T君「いつてきまーす!!」

七回目の活動が小学部のほうへ行くこ

としたのが初めてではないので、T君が何を望んでいるかはわかっていった。だがいつもT君にF F Cの「楽しさ」というのを十分に伝えることができず、遊戯室へ行くという結果になってしまう。

九回目の活動のとき、T君に大きな変化が見られた。いつもなら私が玄関までT君を迎えに行っているが、この日はお母さんと二人で体育館まで来たのである。後で聞いた話だとT君は玄関に来たときに「K先生(私の名前)」と言っていたそうである。

F F Cの活動が体育館からスタートしたこともあり、T君にとっては「初めて」が連続する活動となった。特に印象的だったのがはじまりの会である。

司会のお姉さん「今日のあいさつ当番はだれかな?…:…:Tくん!!」

私「Tくん、あいさつ当番やって!!」

T君「いまからえええふしー(F F C)のかつどうをはじめます。」

私を含め、多くのスタッフはT君が上手にあいさつ当番をしないだろうと感じていたので、上手く言っていたのを見て驚きを隠せなかった。あいさつ当番の仕

事を終えると、すぐにどこかを探索し始め私を小学部のほうへ引つ張っていった。

私「学校は？」

丁君「あります!!」

私「ありません。」

丁君「あります。」

私「怒られるよ」

丁君「Hてんてい」

このやり取りをきっかけとして小学部のところへ行くことはこの日に限ってなくなつたが、活動の終わりの時間の頃になると「Hてんてい怒るよ」といつて泣き叫んでしまった。スタッフ自身子供と関るのは隔週の土曜日だけであるので、子どもがそれまでの間に①どのような経験を積んで②どのようなことを学んだかということ。つまり、子どものドミナント・ストーリー(自己物語)を大切にしなければならぬと感じた活動となった。

(2)探求ネットワークの持続可能性

ここまで、探求の歴史的背景等について概観してきましたが、そのような方や

能力の育成を支えているのはいったい何でしょう。自分たちのやってきたことを「報告書」として残すという基盤がつけられてから、その取り組みが現在まで受け継がれてきました。私はこれが一番重要であると考えています。「探求」の活動なんて福井大学でなくてもできそうですが、こんな活動をやって意味があるのか最初はわからないでしょうが、最初からそれらの意味をしつかりと理解して活動を展開しているスタッフはほとんどいません。でも、なんとなくうまくいっているように見えます。そこにはもちろん、うまくいっている理由が潜んでいるのですが、一方で見えないところに大きな落とし穴があるのも事実です。そこで重要になってくるのが、キー・コンピテンシー^①の中心に位置づいている「省察」という営みです。

省察とは、自分自身の取り組みをふりかえってその意味を問い直し、これまで気づいていなかった新たな視点を見出し、いくつ営みです。反省ではないので、前向きな営みになります。

キー・コンピテンシーの紹介の中で、

「経験を他者に伝える」ということを紹介しましたが、「なかまつり」という最終発表で発表をするために、子どもたちは活動日の最後、その日の活動を振り返って、自分たちの取り組みの意味を確かめ、新たな見通しを持って帰ります。学生スタッフも同じように活動後、同じようなことを行います。その日の活動で子どもたちは何を学んだのか。自分たちがデザインした活動にはどのような意味があったか。まだまだたくさんありますが、このようなことを学生スタッフは常に考えて活動の運営を行います。

しかし、一回一回のパッケージ化された振り返りでは気づけないことが多くあるというのも事実です。図1をもとにして説明すると、○印を学生がこれまで経験してきたこととしておきます。毎回の活動の振り返りを、報告書としてまとめる際は、すべてを記述することはできないので毎回の活動の中で印象に残っていることを中心に、子どもの学びの姿や自分自身の学びについて「物語風(ナラティブ)」に綴っていきます。そのようにしてまとめることで、子どもの成長につ

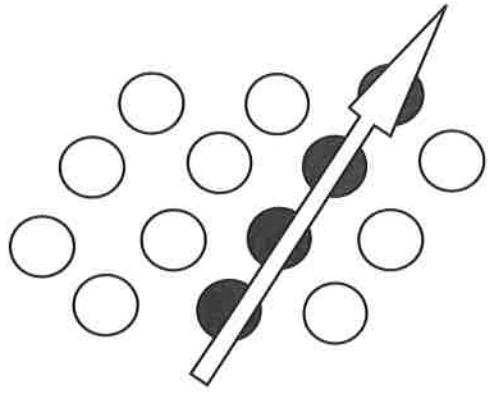


図1：物語の語り

いて時間軸に沿って捉えなおすことができ、新たな視点に気付いて自分たちの実践をより深く見通せるようになっていきます。これが、次年度以降や後の活動につながっていきます。

そして、学生たちがまとめた報告書というのは毎年個人報告書として残され、次の世代へと継承されていきます。こうした幾重にもわたる協働的な省察のスパイラルが、探求ネットワークという実践コミュニティの持続可能な発展を支えています。

参考文献

遠藤貴広(二〇一〇)「探求ネットワーク」
教育地域科学部地域参画型科目紹介パンフレット。

加藤儀直(二〇一〇)「物語の構成」
二〇一〇年度前期教育相談特講個人最終レポート。

加藤儀直

福井県立大野高等学校卒業

福井大学教育地域科学部学校教育課程教育実践科学コース在籍(三回生)
専攻は教育方法学(カリキュラム論、測定・評価論、授業論、教育心理学)
探求ネットワークでは、ふれあいフレンドクラブ(FFC)に所属し現在三年目スタッフとして活動を行っている。

「教育」というのは、だれでも語ることでできることではありますが、そのようなことを理論的に説明しようとするのが「教育実践科学」という分野の特徴であると考えてます。あまり聞きなれない言葉ですが、現場に出てから一番重要なことを教育実践科学、臨床教育科学の二コースが示唆していることであると思います。高校生のみなさんには、ぜひこのような学問分野があることも知っていただきたいと思えます。